



目を開けると青空が雫孔いっぱいになり、雲が大きく流れていた。周囲の山々には穏やかな枯葉色がふんわりと広がっていて、雲間から出たりはいったりする日の光に応じて輝いたり、しずんだりしていた。さっき崖の中ほどを鹿の親子がたどっていった山の頭もわずかに見える。それにしても大きく、つややかな青い空だ。こんな中にゆったり渡っていく雲のように、おおらかに生きてみたいもんだと、腕組みをして横になったまま静かに考えていた。

山から下りて、バスを待つ間ビジターセンターのベンチで寝ていた。実に気持ちの良い眠りであった。

昨夜は四人で、5リッターの酒と、ウイスキーとテキーラで楽しく飲んで騒いだ。みんな朝から元気だ。今日は一部ザイルで遊んだりしながら、誰もいない広川原を下り、流れを渡ったり、火をたいたりしてゆっくりした。たまにはこんな時があってもいい。

水筒に良い酒を詰めてきたおじさん。マイペースで、おでんの具は持ったが箸は忘れてふらりと出てきたおじさん。「その餅持って行かれたら正月のがなくなるよ。」と怒られながら「すまぬすまぬ。」といただいてきたおじさん。家の買い物ついでにそっとおでんなども買っていたおじさん。クリスマスやら年末のあわただしい中、それぞれの事情からさっさと逃げてきたおじさんたちのハイキング。まあ、みなさん家にいてもたいして役に立っていないのだからなーと思われるから、まあいいだろう。

みんなの持ってきた食料を全部出すと、おでん各種や、白菜、イモ、ひき肉、ニンジン、キリタンポ、エノキ、ナス、玉ねぎ、うどん、もち、ラーメン、コーヒー、パン、ハムにチーズ、あとはもう忘れたが、それらを半分壊れた元ナベにいれて何でもかんでも煮てしまう。実に怠惰であり、いい加減なものだが、しっかりと温まり、おいしい。あとは酒があればいい。いつも「常温だ！」と叫びつづけて数十年のおじさんも、暗くなりつつある広場の中で「酒は熱間にかぎる。」などとのたまいい火は勢い良く燃えて酒がどんどんなくなる。そのうちに、広場の中央の石のステージからはドイツ語の第九が響き、勝手な歌や、うなり号が夜空に響いた。

しかし、今年はいまいかないことばかりだったなー。来年はもっとひどいことになりそうだという予感を抱きながらも、何とか生き延びていかなければいけないなー、がんばらねばいかん！などと大して裏づけのない気合を入れる。楽しく生きていく方法はようやくわかってきつつあるが、正しく飯を食べていく仕組みがまだわからない。困ったものだ。「こんなところで吼えている場合ではないのだ。」と吼えてみた。

良く飲んだ山でした。もっとも先週も二人で山を歩いて、4リッターの酒と、ウイスキー1本、ワンカップ各自数本、缶ビール2本その他を飲んで翌朝6時から行動していたのだから、まだまだ体は元気なようだからどうかなっていくのではないかなー。まあ、元気にやってみましょう。